



photo 藤田佳久

「それぞれの文化を尊重して、その人らしさを守りつづけてい

「すてきな笑顔が消えないように支えていきたい」

ある日、スーパーパーおばあちゃんと言われる一人暮らしの96歳のAさんが、痛みや吐き気が強く入院してしまいました。「入院するともう終わりだから」と頑張っていたようですが、あまりにも辛くて、しばらく食事も摂っていないようでした。入院二日後、お昼ご飯を「美味しい」と言って完食。お孫さんは「宇宙人か化物か」と驚かれ、その言葉にAさんは満面の笑みを浮かべて喜んでいました。お孫さんもそんな元気なおばあちゃんを見て、あとからAさんの好物のウニを買ってきてくれたそうです。

Aさんを喫茶の時間にお誘いすると、「コーヒーが大好き」と言われ、車いすで参加しました。もともと話好きのAさんは、「私の家は人が集まる家なの」と言う通りすぐに場を笑いの渦に巻き込みました。居合わせた患者さんやご家族の方たちは、96歳という年齢を聞いて更に驚き、「私もあやかりたい。こんなに良い歳が取れるなんて」と握手を求め、文化が取れるなんて」と握手を求め、文化だから。

人生の先輩である高齢の方をケアする上では、とりわけ「その人の文化への配慮」が大切であると言われていきます。つまり、一方的に自分の価値観を押し付けたり、医療・看護の視点でケアするのではなく、相手が歩んできた背景（文化）にも十分に配慮するよう心がける必要があります。

痛みや吐き気が治まり、食欲も増し、元氣を取り戻したAさんが病院の環境に慣れ、つい無理をして転んだりしないように気をつけることはもちろんですが、医療者本位の看護をせずに、Aさんの過ごした歴史と一緒に振り返り「人生の物語」を語って頂きながら、すてきな笑顔が消えないように支えていきたいと思えます。「自分で何でもする」。「何でもやってきた」。それがAさんの文化だから。

吉村 良子・文 函館おしま病院 ホスピス病棟看護師長



よしむらりょうこ
社会福祉法人函館厚生院函館
厚生院看護専門学校卒業。
平成16年函館おしま病院勤務。
平成22年12月より同病院ホス
ピス病棟看護師長に就任し、現
在に至る。